

東西南北

2017.2.21



残念な数字だ。19日投票の大分市議選。投票率が48・18%と、過去最低を更新した。有権者の半数以上は権利を行使しなかったのである。元大分トリニータ選手・高松大樹さんの出馬という話題性があり、18歳選挙権と相まって上向くのではとみていたが、甘かった▼幾つかの大手労組が候補を立てなかった、守りの戦いが目立った、市民の関心を呼ぶ争点が少なかった―など原因が考えられよう。詳しい分析は今後に待つが、根底には、48万人に膨れ上がった大分市の「大都市性」と、現代社会を覆う政治への不信感があるように思う▼小規模自治体では住民は顔の見える個人として認知され、役割を持つ。それが地域への主体的な関わりになる。一方、大都市は個人を無名にし、人々を「量」としてしか捉えない。地域のつながりは薄くなり、政治的無関心が生まれる▼さらに深刻なのは不信感だろう。「投票しても何も変わらない」である。首長や議会が期待ほどではなかった、暮らしは一向に良くならない、といった失望である▼いずれも民主主義の危機につながる。無関心は住民の政治監視機能を失わせ、既存政治に対する不信感は、独裁的な政治への待望に姿を変え、懸念がある。昨今は小規模自治体でも投票率が低下傾向にあり、懸念される▼率のアップに奇策はない。政党や候補者が政治への真摯な姿勢を示すこと、主権者教育の徹底しかない。

(2017年2月21日付朝刊1面)

- ① このコラムの筆者は、低投票率の根本原因を2つ指摘しています。記事の中から抜き出しましょう。
- ② ①で挙げた2つの根本原因は民主主義の危機につながるとして、具体的な懸念を挙げています。何と何か、記事の中の言葉を使って書きましょう。
- ③ 選挙を面白くするために、何かいいアイデアはないでしょうか。若者の視点で考えてみましょう。